

れい明

和田の里探訪総集編



米光金淵の延命地蔵（国道376号改修前の位置）

周南市和田公民館

発刊によせて

和田公民館の玄関脇に、高さ約一メートルほどの古い碑があります。表面には、丸みをおびた字で「一日一力一心」と力強く書かれており、訪れる人からこれは何の碑ですか？と聞かれます。和田の里探訪^{No.16}に碑のいわれが詳しく説明されています。よく引用される毛利元就の百万一心の伝えとともに「一日一力一心」とも読まれ、一人ひとりの力を結集すれば万難を排して明るい未来を築くことができるという合言葉だと、筆者の郷土史家 原田義明さんは述べられており、昭和3年当時の和田村長さんをはじめ、和田村民の村づくりに向けた熱い気持ちと心意気を感じることができません。

さて、この度平成16年2月から「れい明」に連載されている「和田の里探訪」が34回目を迎え総集編として発刊されます。このシリーズを続けていくにあたっては10年余りもの歳月を費やされた等、ご本人からのご苦労話もお聞きしております。執筆に並々ならぬ熱意で、長期にわたる連載にあられた 原田義明さんには敬意と感謝を申し上げます。ありがとうございます。

この本では、私たちが日頃目にする何げない風景の一部としてそこにある碑や、建物、地名、自然なども、たくさんの言い伝えや先人の思いがこもっているんだよと教えてくれます。豊かな歴史が詰まっている「和田の里」を愛する人たちが、さらにこの地を大好きになっていける道しるべとしてご活用いただきしたいと思います。

平成23年10月

和田支所長（兼）和田公民館長 大野 登志枝

和田の里探訪 1

山紫水明の和田地区には、多くの史跡や文化財があります。今回から、これらをシリーズで紹介します。一度探訪されてみてはいかがでしょうか。

猿田彦大神

猿田彦大神は、天孫降臨の際、これを待ち受けて案内した国津神であるが、後に道祖神と混同し、また猿田の猿を干支の申と混同して庚申の神として盛んに祭るようになりました。

この和田の里の猿田彦大神も道祖神や庚申の神として祭られたものです。また道祖神は、後に交通安全にも混同されています。

和田地区の特異的な猿田彦二基を紹介します。

矢地峠の猿田彦大神

県道鹿野矢地線が馬神農免農道と交差する角に、猿田彦の石碑が

あります。県道鹿野矢地線の改良工事がされ開通した時、この場所から約二百以下の矢地峠河内社に鎮座していたものをこの地に移されたものです。高さ約一・四メートル、最も広い横幅は、七三センチもあります。裏に、天保六年の文字が刻まれています。



大谷の石像（丸彫）

大谷のやまびこ店の裏山に当たる「神明社境内」に鎮座しています。丸彫の衣を羽織った石像です。高さ百十五センチあります。



このほか、和田地区内には、先山（二基）、巢山、西迫上、秋字明、原赤、埤の畑、米光上十郎、池広、西広沢、湯野峠にもあります。

郷土史家 原田義明

平成16年2月



和田の里探訪2

村の生い立ち

私たちのふるさと、この「和田村」は、いつごろ、どこから開けてきたのだろうか・・・。

昔、むかし大昔の人たちは、富田川の河口のあたりに住みついて海で魚や貝を採り、陸ではイノシシ、ウサギなどを取って暮らしていました。この時代を「縄文時代」と言います。

それから後に、稲作（米づくり）が中国大陸から朝鮮を渡って九州に伝わってきました。九州から東日本へと広まっていきました。この時代を「弥生時代」といいます。今まで富田川のとりに住みついてきた人達が、米を作るため、平坦地と水を求めて奥地へ奥地へと入って行きました。富田川から上流の中野川から升谷へと入りました。また一方富田川の上流四熊川から埴の畑へと入り込んできたのです。

しかしまだその頃は、辺り一面

大森林で人さえ寄せ付ける状態ではなかったでしょう。

文治二年（一一八六）俊乗坊重源上人が、東大寺再建の用材を伐り出すため、徳地の杣（そま）に入りました。

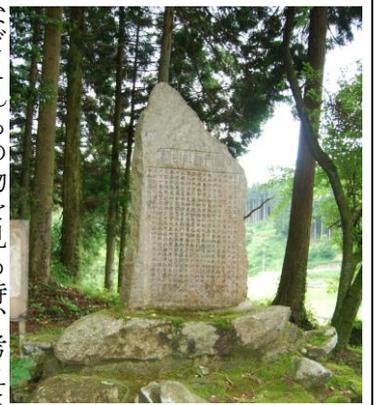
この和田の大森林からも木を伐り出したものと思われず。

ただしこの頃においても大森林で人家はほとんど無く、ここに一軒というぐらいで、ほとんど人家は無かったと言われています。

私達のこの村は、どの方面から開けたかと考えますと、やはり中野から升谷へと入り、又一方は四熊から埴の畑へと入りここから開けてきたものと考えられます。



今、埴の畑の山中に「宝篋印塔（ほうきょういんとう）」の古いお墓があり、また升谷の河内神社の境内にある「河内神社由緒碑」



などこれらの物を見る時、考えさせられる貴重な史跡なのです。この貴重な文化財を次世代に継承していくことこそまた大切なことなのです。

郷土史家 原田義明

平成16年3月



和田の里探訪3

日出石

高瀬の西迫上の愛宕社への登り口の畑のそばに「日出」と彫った、高さ一メートルの石が立っています。

むかしむかしの春、千石岳の刈り草山で、毎日野火が出て、ふもとの民家に飛び火して、災厄を受けました。そのころ、山すそに万作という独り者が住んでおり、たまたま失火し、刈り草山に延焼させ、損害を受けた人達から、万作の仕業と思われ、村を追い出される事になりました。

一方、亀屋という家では万作を憐れみ密かに酒や食物を与えて慰めました。

万作は亀屋の手厚い心づくしに感謝し、哀れな旅立ちをしました。その後も野火は絶えず村人は、万作を疑ったことに心を痛めました。村人の中には、万作のおん霊が火をくわえて飛ぶのを見たという話も伝わりました。

ところが亀屋だけは、火の粉がふりかかっても自然に消えたと言われています。その後、村人たちは、「日出」石を立て火が出ないように、毎日朝夕拝んだと言い伝えられています。



(参考文献「しんなんようぶらり探訪」)

郷土史家、原田義明

平成16年4月



和田の里探訪4

来間木相摸の墓

来間木相摸

今の「車木」を昔は「高手村」と申しておりました。

その頃、村の人達の暮らしは殊のほか厳しく、難渋な渡世をして暮らしておりました。そのころ、何処から来たか「来間木相摸」と申す落人が観音堂に住み着いておりました。

そして村の難渋な人達には金子を遣わし、また農作業も進んで手伝うなど、村の人達のために、何かと協力し滞留しておりましたが、その内病にかかり亡くなりました。

村の人達は、今までのこの恩を厚く忘れず、観音堂のそばに墓を建て、丁寧に葬り供養しました。厚恩難忘。

それ以来「来間木」と申すようになったと、言い伝えられています。

す。

今その観音堂はすでに廃絶し往時を偲ぶものはありませんが、その跡地に量感溢れる自然石が建っており、これが来間木相摸の墓と
言い伝えられています。

その傍らに宝篋印塔（ほうきょういんとう）など古いお墓も埋まっています。



「来間木」が「車木」に変わったのはいつなのか、定かではありません。

郷土史家 原田 義明

平成16年8月

和田の里探訪5

紙すきの義民

升谷の大江の源八

紙漉き（す）き窓のある農家、今はもうこの窓のある家を見る事は出来ない。紙をすいていた名残も、今完全に消え失せようとしている。

昔農家の殆どが副業に紙をすいていた、然も百姓達の生計は難澁をきわめていた。

藩は、その為に割増金を出していたが、その金が紙漉き百姓達に渡っていない事を知った大江の源八は、払い渡しを願い出て、勘場の役人に再度陳情せるも要領を得ることもなく、一向にらちがあかないことを悟り、萩に出て直訴せんとしたところ、その企てを勘場役人の知る所となり、源八は勘場に引き戻されて厳しく糾明され、

首は高瀬小津坂峠に、さらし首として埋められた。

ときに、宝暦五年（一七五五年）乙亥十二月十六日、徳地紙すき百姓の犠牲となって命を終ったのである。

後になって、役人の悪事は改められて、割増金も払い渡される事になった。

徳地の紙すき百姓達は、深く源八の徳をしのび、その恩義に感ずるあまり、升谷の方向に足を向けて寝る者は無かったと言われている。

今墓は升谷にあり、帰直禅峯知雲信士、宝暦五年乙亥十二月十六日とある。



首塚

首塚は高瀬小津坂峠下り坂の角、榊の木の根元に無銘の野面石が埋められている。

終りにこの大江の源八の伝説なども、紙すきの重い意味を持つ仕事であった事情をとくと考えさせるものである。

和田地区の紙すきは、昭和四十四年に完全に消えた。だが紙すきの伝説はいつまでも語り続けられるであろう。

郷土史家 原田義明
平成16年12月

大江の源八の墓



大江の源八の碑



和田の探訪6

郷土が生んだ明治維新の傑僧

島地黙雷

政教分離の先覚者

慶応二年（一八六六）王政復古の号令が下って、明治維新となり、明治新政府が誕生しました。

明治新政府は、日本は神の国である、これから神道を以って政治の基本とする政策を打ち出しました。

我が国はこれまで仏教を基本とした神仏混淆の政策だったので

す。これが明治新政府になって政治の根本がひっくりかえったので

す。この頃すでに、廃仏毀釈（はいぶつきしゃく）の嵐が全国に広まり、寺院や仏像は焼却破棄され、貴重な経典や仏具なども破りすて、焼き払われるなど、仏教界ははげしい弾圧にさらされながら大きな打撃を受けておりました。

この惨状を見るに絶えず、奮然と起ち上がった真宗僧こそ「島地黙雷」だったのです。

黙雷は、天保九年（一八三八）

二月一五日、周南市大字埵升谷の専照寺第十七世清水円髓の四男として誕生しました。

明治元年、黙雷は、同志大洲鉄

然（久賀覚応寺）、赤松連城（徳山徳応寺）らと上京し、困難な仏

教界の先頭にたつて本山本願寺の改革に取り組み、政教分離・神

仏分離、の説をたて宗教独立の急務を主張する。明治八年漸くにしてその目的を達成することが出来た。

神道に従属した仏教を自立せしめたことは、偏に黙雷の努力によるものであったのです。



明治四十四年享年七十四歳で遷化されました。

維新期の混迷を抜け出し仏教界の衰運をくいとめた明治維新の傑僧であった。

郷土史家 原田義明

平成17年1月



明治仏教界の巨星 島地黙雷上人顕彰碑

天保九（一八三八）年専照寺第十一世円髓の四男として当寺に誕生。はじめ佐波群右田錦園塾で儒教を、のち肥後の原口針水に師事して宗学を学ぶ。恵まれた才能と行動力によってその活動は多岐にわたったが、生涯を通じて常に念頭にあったのは、激動する政治社会の中で仏教の主体性をいかに確保していくかということであった。

それは、排仏思想の立場から火葬禁止を發布した幕末長州藩の宗教行政に異議を唱えると同時に藩内各地で僧風改正運動に従事したことからはまった。ついで、明治元（一八六八）年には郷党の同志大洲鉄然、香川葆晃、赤松連城らと共に上京し、他宗に先駆けて本山西本願寺の宗教改革に着手。さらに明治五年、日本宗教界最初の渡欧をして諸外国の宗教事情を視察し、政教分離・信教自由が近代国家の基本原則であるとの認識を深め、新政府の廃仏毀釈・神道国教化政策を厳しく批判し、これを変更させることに成功した。

その後、執行長をはじめ要職を歴任して教団組織の近代化に尽力すると共に、海外布教、女子教育、雑誌・新聞出版、社会福祉事業の推進等、広い分野にわたって多大の貢献をし、仏教界の巨星といわれた。明治三十八年に奥洲布教総監に任命され、居を盛岡に移したが、晩年まで故郷の人情、風物をこよなく愛した。明治四十四（一九一）年没。七十四歳。

元龍谷大学教授文学博士 児玉 識撰

平成二十二年十一月二十一日

島地黙雷上人没後百年記念事業実行委員会

和田の里探訪7

伝説

きりきり坊の墓

東広沢（現・池広）から小道に入り、池谷に向かう。

由来書に「この所に一間四方、深さ五尺ほどの清水池があつて、谷の深い所であるから池谷という。この池は宝永四年の大地震で出水が止まりそれ以来埋もつて、今は池の形はなくなつた」とある。

池谷の集落は今ももう家もなく、うっそうとした暗い山となっている。峠の奥に墓地があり、六地藏、無縫塔（お坊さんの墓）が樹木の中に埋もれている。観音堂も既に廃絶し往時を偲ぶものはない。

この観音堂の開基了玄和尚は、この村を豊かにしようと村人たちと土地を開墾、開作に精を出し、その完成に思いをはせていた。

工事も順調に進み完成し、了玄和尚は村人たちが平穏な生活が出

来るようにと、心願をかけ、当時最も難行とされていた「生き埋めの行」に身を苦しめて村人たちの平安を祈った。

棺を埋めるとき長い竹の筒を立て、その下で一生懸命お経を唱えながら焼香し祈願を続けていった。

「線香の煙が立ち上っている間は、私は土の中で祈り続けていると思つてくれ」と言い残し、のち息たえてしまったと、言い伝えられている。

村人達はお坊さんのお墓に「當庵開基了玄禪定門明和九年辰四



月」と刻み建て了玄和尚の篤行を今でも語り続けている。

自分の一命を投げ打つて村人達の安穩を願う昔の開墾開作がいかに大事であり、また困難であつたかを思わせる、高僧了玄上人の崇高な行にお香を捧げたい。

この項をもって「ふるさとの伝説」は終了します。次回からは「和田の里石造文化」を探訪します。

郷土史家 原田義明

平成17年2月

和田の里探訪 8

貞弘永次郎

夫婦頌徳碑

高瀬に古刹三汲寺がある、山門をくぐり境内の奥に入ると、花崗岩の亀甲型台座に、円柱型の碑が建っている。

碑の前面に、毛利元昭公（六九代藩主）の筆で「孝順」と刻まれている。題字は、高瀬松田稔氏の筆になる「孝子貞弘永次郎夫婦碑」と肉太く彫付けられている。

後ろに廻ると、碑の全面に、明治の国学者近藤清石の碑文が刻まれている。

永次郎は文化十二年（一八一五）三月二十八日埵村升谷清左衛門の長男に生まれ、幼き頃父母を失い祖父源左衛門に育てられ三十歳の時、つゆと結婚した。

妻つゆは、文化六年（一八〇九）高瀬村西迫の弥右衛門の二女として生まれ、幼児から孝心厚く一四歳の時母が病気に罹り、家事一切を引き受け夜は寝る暇もなく、心

を込めて看病すること二十年に及んだ。二十年一日のような孝心に藩主は両度も表彰した。

然し母は天保十三年（一八四二）ついにこの世を去った。

つゆはすでに三十六歳の時であった。

翌年（弘化元年）六つ年下の永次郎に嫁した。結婚後は夫と共に祖父源左衛門に対し真実の誠で孝養の限りを尽くす。妻つゆの孝心は夫永次郎に以心伝心その感動を誘い夫婦共に励まし合って両親に孝養を尽くし、地域の人々の為にも心をくだいて尽くした。代々の藩主殿様から頂いた表彰も二十七回にも及んでいる。



碑文の終りをこの一首で結ばれている。

この村に真玉ありけり、ひとつだに、得がたき真玉。ふたつありけり。と・・・

× × ×

私は三汲寺の階段を下りながらふと思う・・・

いま人間疎外とか、親子の断絶とか、家庭の情緒の不安定から来る悲劇があとを絶たない現今、新しいふるさとづくりの根本をなすものは、先ず家庭の中に「孝順」の灯をともしつづけることではなからうか、と。

※この碑文の全文は紙面の都合上割愛しました。もしご入用の方は公民館にお知らせください。早速お届けします。

郷土史家 原田義明

平成17年3月



和田の里探訪 9

榊原先生の墓

矢地峠部落への取り付き、丘の上の墓地に、大きな亀跌（亀の形の碑の台石）一m八十cmにも及ぶ墓碑がある。

前面に「阿奈元あなげんき氣榊原直人藤原勝平靈神」と筆太に深く刻まれている。



常盤園という寺子屋の先生の墓である。馬神、夜市、湯野方面



墓にしては珍しい亀跌

から沢山の門弟が学んでいたと言われ、この近郷で有名な先生だった。

榊原家の子孫は現在島地の花尾八幡宮の宮司である。

先生は人格者で、平素人と話される時相手は人の悪口を言っても、決して同調される事は無かったと言う。

弟子の藤田兼蔵氏は先生の墓の前に灯籠を寄進した。

先生の墓の下の道を通るときは、必ず脱帽し敬意を表していたという。

子弟の教育にひたすら精魂を打ち込んだ先生の人となり、門

弟たちは感化され師を思いこのお墓の建設に尽力し、いつまでもその徳行を慕い続けている。

× × ×

「亀きふ跌」とは石造の亀の背の上に碑石などをのせる、亀の長命にあやかり、永く後世に伝わる事を願ったものである

郷土史家 原田義明

平成17年8月

和田の里探訪 10

野辺の神と仏たち

(その1)

お地藏さん——

どうしてもそう呼びたくなる。

お地藏さんには、「地藏菩薩」といった正式な名称があるのだが、やはり「お地藏さん」の呼び名が一番ふさわしい私たちに身近なほとけさまです。

地藏菩薩は私たちがやさしく見守って六道（地獄、餓鬼、畜生、修羅、天道、人道）のちまたに立ち、現世利益、死後のあとさきまで救ってくださる私たちに深く結びついた仏様です。

私たちは、野や山に路傍の片隅に何気なく祀られている、神や仏がたくさんあることに目を向けなければなりません。

それは私達の先祖がどんな時代にも懸命に生きてきた証そのものなのですから。

今和田の里の野辺には神と仏たちが、このように存在しています。

| 石神 | 石仏 | 種別 |
|-----|-----|-----|
| | | 地区別 |
| 6基 | 28基 | 高瀬 |
| 2基 | 16基 | 夏切 |
| 2基 | 15基 | 埴 |
| 4基 | 13基 | 米光 |
| 6基 | 16基 | 馬神 |
| 20基 | 88基 | 計 |

石仏らしいものを見ると、何でも「お地藏さん」にしてしまう、それがふつうなのです。

これらの石造物は唯一の歴史の証言者としての役割を持っています。

この信仰遺物を大事に次の世代に引きついでいくことこそ大切だと思ふのです。

郷土史家 原田義明

平成17年12月



榊を杖に大谷の道祖神と 和田地区で一番古い

三汲寺のお地藏さん

和田の里探訪 11

苔むした路傍の石仏、黙して語らぬ野辺の石仏、誰がために供養されてきたのか、長い風雪の間、文字はもう摩滅して既に知ることの出来ないものもある。今回は注目すべき石造物をいくつか取り上げて、文化や信仰について考えてみよう。

● 和田地区で最も古い三汲寺の「地藏菩薩」

法界塔元禄十四年辛巳六月二四日
(一七〇一年) 300年前



● 小原洞ヶ浴の「馬頭観音」
三面念怒相 明治三十七年七月十日
(一九〇四年) 百年前
顔が三面で怖い表情をしています。



● 公民館前の「二日一力一心碑」

昭和三年十一月(一九二八年)

和田村長 重田耕作

毛利元就は築城の際人柱のかわりに「百万一心碑」を埋めて城の安泰を祈ったと伝えられている。

この碑は御大展記念として建立。



● 米光伝福寺の「日本廻国六十六部供養墓」

供養墓 宝永辛卯三月吉日

(一七一一一年) 二百九十年前

六十六部とは、日本六十六ヶ国の霊地に書写した法華経を奉納する行者のこと、奉納の途中この地で死亡したのだろう。



● 米光金淵の「延命地藏」

法界 文政十年丁亥七月二四日

(一八二七年) 一七九年前

金淵は水底深く溺れ死ぬ子供が多く、或る日白衣に抱かれた子供が助かったという。



● 矢地峠の「猿田彦大神」

○猿田彦大神 天保六年秋九月

この○は太陽・和を示すものである。招福延命を願う、のち道祖神とも習合する。



● 田戸の藤村俊男氏の地内の「宝篋印塔と五輪塔」(年代不詳)

田戸の部落を開いた武士の墓と思

われる。この墓は「宝篋印塔」という傍らに数個の五輪塔も立派で貴重である。



● 大原五社宮の「鳥居」

鳥居の別名華表とも言う。

奉献華表一基文化庚午晩 既望



註 石造物には読みにくい文字が多く使われています。これを異体文字と言います。例えば、松(恣) 秋(一)年(天)村(一)崎(寄) などなど

郷土史家 原田義明

平成18年1月



矢地峠猿田彦大神



小原洞ヶ浴「馬頭観音」



田戸宝篋印塔と五輪塔



文化
庚午
晩既
望



大原五社宮の鳥居と
柱に刻まれた文字



華表一基

和田の里探訪 12

米光の城山

(中世末期の山城跡)

米光の伝福寺の裏山に旧山城跡がある。標高一九二メートルの小さな険しい山である。

約百六十年前の調査書「風土注進案」に「杉次郎左衛門行並といふ人の旧跡と言ひ伝う」とある。

しかしこれについては正しい文献もなく確証はない。

今正しい見方として、石見国(今の島根県)津和野三本松城主吉見信頼の構えたものと言われている。

頂上を本丸(30m)少し下がったところに二の丸(20m)があり、その周辺に防御施設あり、その周辺に防御施設あり、空堀、土塁、堀切、壇床、堅堀などの跡が残っている。

山城は、険峻で眺望のきく場所で、前面は山陽道の裏街道で、矢地、島地方面も眺望でき、富田、福川、夜市街道の分岐点で徳地を結ぶ関門的位置にある。北は島地川が自然の濠を形づくる「猪の曲り」の急坂に面している。

山城は平時は麓の館に住み、いざ戦いとなると山頂の本丸に楯籠るのである。

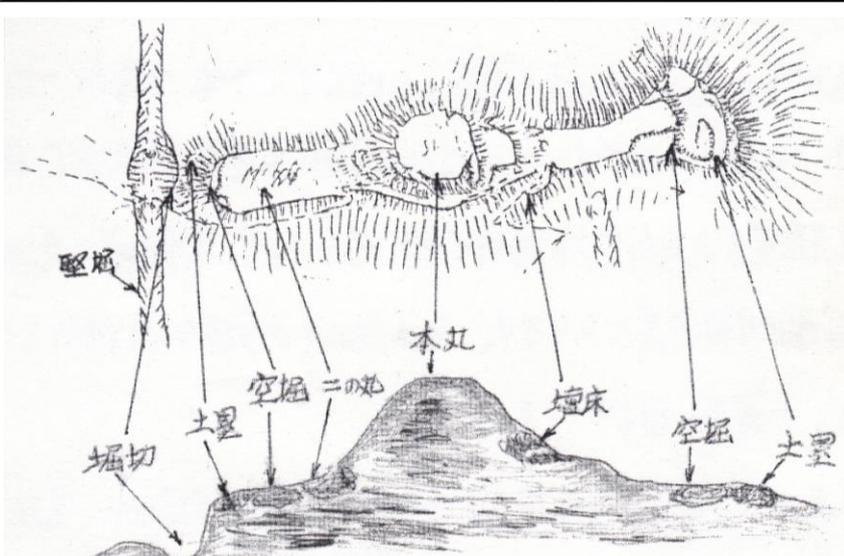
それらを考えると、この名刹伝福寺はその館の跡地であったとも考えられる。

津和野三本松城主吉見信頼の所領上徳地(和田、串、島地)福川の若山城主陶弘護の所領下徳地(柚野、八坂、出雲、岸見)との長年の攻防が続く中にこの米光城と若山城は対抗の位置に築かれている。

この米光城跡もおよそ六百年の時を経ているものと思われる

が、今尚も見事な遺構をとどめている事はかけがえの無い歴史遺産として極めて貴重なものであると思うのである

郷土史家 原田義明
平成18年3月



堀切：攻めてくる敵兵をくいとめる。進路を阻む。

空堀：堀床に隠れて見張る。敵兵を射つ。

土塁：土を盛って圍う。砦。

堅堀：攻めてくる敵兵の横の移動を防ぐ。

壇床：進行を困難にする。

防御施設

和田の里探訪 13

明治維新の

志士たち

文久三年（一八六三年）五月、長州藩は、下関で外国艦隊打ち合の戦いで、外国艦隊の強さを嫌と言うほど知らされ、長州藩の無力を骨身にしみて悟ったことから、高杉晋作によって奇兵隊が生まれました。

これにならって防長各地に国土防衛のため「諸隊」が結成されました。

私たちのふるさと和田地区は、江戸時代は萩本藩領で徳地宰判に属していました。

この徳地に「健武隊」が結成されました。和田地区からこの健武隊に十二名、奇兵隊に二名の入隊者がありました。

その頃長州藩の立場はいよいよ苦しく追いつめられていて、ついに第二次長州征伐となり幕府軍は防長の四境に迫ってきました。

これに対戦する為、健武隊は芸州口へと転戦していきました。これが四境戦争です。

・今澄久吉（二十二歳）

元治三年六月二十日芸州友田口にて戦死

・富永爲之進（十七歳）

元治三年八月十日芸州河津原にて戦死

この戦いでお二人が戦死されました。

・久富 豊（二十歳） 十七歳の折藩主に従って江戸藩邸に仕え藩

の要職についていました。文久三年六月奇兵隊に入隊、十月十四日但馬國生野に於て生野義挙に加わり妙見山にて同志共々ことごとく自刃したのです。

後に従五位が贈られています。

私たちのこの和田地区にも明治維新の志士たちがいたのです。

若き血潮をたぎらし、青春花も開かずして、新しい日本をつくらうと、明治維新の变革に参画したのです。

維新回天の大きな先駆けであり、尊い犠牲であります。

しかし今、その事績は、だんだ

ん忘れ去られようとしています。

玖珂郡本郷村の招魂場に今澄久吉、富永爲之進、お二人の墓があります。久富豊の墓は、高瀬田原家の墓地にあります。

今唯も訪れる人はありません。

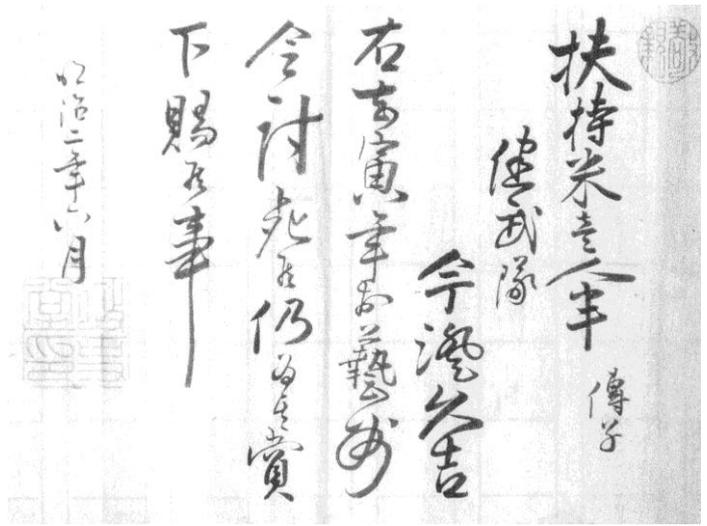
ただ一人として訪う者もない、

この墓地に立った時、何故か「明治維新」とは、一体何だったのだろうか、考えさせられるのです。

郷土史家 原田義明

平成18年8月

四境戦争のほう賞状（今澄久吉）



高瀬田原家の墓地にある久富豊の墓



広島県佐伯町榎ヶ峠戦死の地に土地の人たちが建立した供養塔
今澄久吉の銘が入っている。



今澄久吉の墓



富永為之進の墓



玖珂郡本郷村の招魂場にある今澄・富永の墓

和田の里探訪 14

高瀬の伝説

日出石

むかし、むかし大昔のことである。千石岳の刈草山に、春になるとたびたび野火が起こって、ふもとの民家に飛火して災厄をこうむったことがある。

そのころ、山すそに、万作という一人者が住んでいた。

たまたま失火して刈草山に延焼した事がある。

損害を受けた村人達は、野火は万作の仕業と思い、佐野という部落に追いやることになった。

追い立てにあった万作は、住み慣れた土地を離れる事に堪えがたいものがあつた。近くにある亀屋という家では、万作をあわれみ、出立する前の晩に、ひそかに酒や肴でもてなし慰めた。

万作は、亀屋の手厚い心づくしに感謝しながら、翌日一人さびしく人

目をさけるように出立した。

しかし、その後も野火は絶えなかった。

村人たちも万作を疑ったことに心を痛めた。村人の中には、万作の怨霊が火をくわえて飛ぶのを見たという話も伝わった。

ところが亀屋の家には、火の粉がふりかかっても自然に消えたという。

その後村人たちは、火の出ることのないようにと「日出」石を建て、毎日朝日を拝んだと、言い伝えられている。その石は、今も藪の中に埋もれながら野火止めの役を果たしている。

郷土史家 原田義明

平成18年12月



和田の里探訪 15

和田地区の

文芸(俳句)に

活躍した人たち

放浪の俳人種田山頭火をしのび山頭火の句碑が、妻咲野の故郷、高瀬西迫に建立された事は、まことに意義深いものがあります。

そこでこの句碑にあやかり、和田地区の文芸活動の流れを思い起こして見ましよう。

高瀬に佐藤魯人、松田寸青、西岡細石、など俳句同好の者が「こだま会」を起こしたのは、大正四、五年の頃でした。

後に、和田村役場を会場とした「かなめ会」に財間蓬矢、重原告天子らが中心となり、時の村長松田寸青が山口図書館長厨川千江を選者とし、昭和四年俳誌「キキス」を発刊、月刊五十号を数えたが、日中戦争勃発などで廃刊せざるをえなかった。

後に、昭和二十八年財間蓬矢を中

心として「すずな句会」を起こし俳誌「すずな」が誕生し回を重ねる毎に同好者も増え上徳地一円に拡まった。蓬矢の献身的努力によって発行回数も九十回も重ねていたが同三十五年蓬矢も亡くなり自然消滅していった。

(和田地区で活躍した俳人)

- 松田 寸青
 - 佐藤 魯人
 - 西岡 細石
 - 財間 蓬矢
 - 重原告天子
 - 高菅 徐風
 - 有井 古溪
 - 清水 竹葉
 - 松田 碧翠
 - 多田 春風
 - 貞弘 緑村
 - 重原 野菊
 - 山県 麓童
 - 山県 雅女
 - 佐藤 武男
 - 河本 月榮
 - 近棟 古釘
 - 片山 志夏
- 印は戦前、戦後を通じて特に

貢献した人。

郷土史家 原田義明

平成19年3月

西迫下の山頭火句碑



和田の里探訪 16

「百万一心」の碑

「往昔毛利元就公傳刻於其牙城之礎石一日一力一心意語簡明而深遠國民應信奉之標語也今慈際昭和大典求類石於吉田幕刻原字樹斯碑」
昭和三年十一月

和田村長 重田耕作誌

公民館玄関脇にある石碑



その昔、毛利元就は広島吉田の居城郡山城を築きました。

当時は築城の際、人柱を埋めて城の安泰を祈ったものです。

元就はこの風習は人道上からも良くないとして、住民全体が一心になって城の守護に当たる意味で、人柱に替えて「百万一心」と刻んだ石を礎石としてそこに埋めました。

この卓見は当時の人々に深い感動を与え、一致協力して城の防備に意欲を燃やした、と伝えられています。

この文字は「一日一力一心」とも読まれ、一人一人の力を結集すれば、万難を排して明るい未来を築く事のできることを合言葉として語り伝えてきました。

今ここに七十九年前のこの碑の前に佇ち、先覚者の先見の明を偲び、新しい、ふるさとづくりの目標を見直したいものです。

郷土史家 原田義明

平成19年4月

和田の里探訪 17

大原阿弥陀堂の仏像群

高瀬大原の道路脇の小さなお堂に、阿弥陀三尊・十一面観世音菩薩・不動明王の五軀の仏像が安置されています。

和田地区で最も古い仏像群として、今注目を浴びています。

その由緒などは不明で、もう往時の阿弥陀堂はすでに廃絶して今はその姿をとどめません。

口碑によれば、この地（現在の専光寺の裏山）に仏光寺という庵寺があったそうで、この阿弥陀如来坐像がこの仏光寺阿弥陀堂の御本尊であったものと思われる。

明治七年（一八七四）明治維新の神仏分離の際、時の庄屋田原家がこの仏光寺を取り壊し、寺宝などは三汲寺に移し、その跡地に田原家の神葬場をつくり神道に変わったと言い伝えています。

阿弥陀堂仏像群



その後、三汲寺からこの地に移されたのは何時頃なのかわかりませんが、大原阿弥陀堂として現在に至っています。

各仏像の制作年代は、阿弥陀如来坐像は藤原時代末期、観世音菩薩、勢至菩薩立像は室町時代初期、十一面観世音菩薩立像は室町時代中頃、木造不動明王立像は室町時代初期頃と言われています。

「観世音菩薩立像、勢至菩薩立像この両菩薩は、後に阿弥陀如来の脇侍として安置されたもので、向かって右側が観世音菩薩、左側が勢至菩薩です。三尊をまとめて阿弥陀三尊といえます。」

今地下の人達はここを小津の観音様と呼んで、観音に対する素朴な信仰の場となっています。

郷土史家 原田義明
平成19年8月

建立されているお堂



隣にある6地蔵様と古い地蔵様

和田の里探訪 18

米光金淵の延命地蔵

米光の金淵には、非常に深く、川底には長穂の竜文寺に続く長い穴があり、竜が住んでいると言い伝えられています。

淵の底には、エンコウが住んでいて、ここで泳ぐ子供たちをよく溺れさせたそうです。

その深い金淵を見守るように川原の上に座っておられるお地蔵様があります。

このお地蔵様の台座の前側に『法界文政十丁亥七月念四萱』と刻んであります。

このお地蔵様は、延命地蔵といえます。

この淵で溺れて亡くなった人達の供養のために建てられたものでしょう。

ある年の夏のことです。子供が大水で流されました。

近所の人達はとても助からないと

言って心配していたところ、子供は流されて向こう岸に立っていました。

近所の人達がみな驚いて助かったわけを尋ねると「長い袖で抱いてもらった」と答えたそうです。

近所の人達は、お地蔵様が長い袖で助けてくださったのだ、ああありがたいことだといって大喜びしました。

それから一層この川原の上に立つお地蔵様を大事にし、よく拝むようになったといわれています。

今でも毎年七月二四日には近所の人達で供養祭を行っており、松明の灯りがお地蔵様を照らし、念仏鐘の音と共に一年の無病息災を祈ります。

× × ×

註・現在このお地蔵様は国道三七六号の道路改修で淵より少し下流に移っています。

郷土史家 原田 義明

平成19年10月



和田の里探訪 19

伝福寺境内の 日本六十六部の供養墓

米光に法隆山伝福寺がある。その本堂の脇に、胸前に禅定印を結び、宝珠を手にして座しているお地藏さんがあります。

その石作りの台座には、「日本六十六部供養宝永八年辛卯三月吉日重峰清珍」と刻まれています。

この六十六部とは、法華経を六十六部書き写し、これを持って全国六十六ヶ国を巡り、国ごとに代表的な社寺に一部づつ法華経を奉納する。

これを六十六部聖と呼んでいます。

周防国の納所は新寺（周東町）長門国は一の宮（下関市）とされています。

しかし六十六ヶ所の全国を行脚しながら、一国づつ奉納することとは、相当苦難なことで、強い意志と体力を要します。

この六十六部聖も奉納の途中、力尽きこの地で埋葬され、重峰 清珍なる人が宝永八年（一七一）辛卯三月吉日にこの地藏菩薩を建てたと伝えられています。

今なおも名もなき聖を弔ったこのお地藏様は今ひっそりと

人に見守られ、子どもたちに愛されています。

郷土史家 原田義明

平成19年12月



境内にある多宝塔



日本六十六部の供養墓



境内にある歌碑



境内にある歌碑



鐘楼堂
22

和田の里探訪 20

湯野峠の

地蔵様と

猿田彦大神

湯野温泉への通り道、湯野峠道端に地蔵様があります。

石の台座に「三界萬靈宝曆十一年十一月廿四日願主自住」と刻まれています。

けんらん豪華な他の仏に比べて何の飾りもない質素な丸坊主の地蔵様はいかにも庶民的で身近な存在です。

この地蔵様は、アジサイの花が好きだといわれ、たくさんのアジサイがある。

その花の間からさわって見たいような、話しかけて見たいような親しみを持ったやさしい顔が見えてくる。

また、年の数ほど箸を組んであげると歯痛が止まったといって今に至るまで霊験あらたかといわれています。

そのそばで、猿田彦大神が「わたしに道案内はお任せください」と訴えるように語りかけ、矢地峠や湯野峠への往来の人びとや車

などのよき道案内と自ら任じ、雨の日も風の日も動くことなく、宝暦の昔（一七六一）今年で二四七年も立ち続けていらっしやるのです。

神と仏が仲よく並んで里人の健康な安全生活を見守ってくださっているのです。

郷土史家 原田義明

平成20年1月



地蔵様と猿田彦大神

和田の里探訪 21

高瀬千石岳

八十八ヶ所霊場由来

西迫下の公会堂は、その昔西光庵といつて、高瀬三汲寺の隠居寺(寮)でした。

今は、薬師如来をご本尊とした観音堂と苔むした石仏や三界萬霊塔など、今わずかにその面影を残すのみで往時を偲ぶものではありません。

ある年のこと、西光庵に四国の悦浄という老僧が三汲寺の許しを得て任んでおりました。

この老僧は自分の病氣平癒の祈願のため各地方の霊場を巡り、徳地三十三ヶ所 観音霊場の巡拝の途次、三汲寺に暫く逗留する内病氣もなおり和尚の許しを得てここ西光庵に任んでおりました。

ある夜霊夢を感じ、観音様の夢をみ、観音様が枕元に立たれ「悦浄よ、お前の病氣もだいぶ良くならかけたが、この千石岳に弘法大師の八十八ヶ所を勧誘したらどうか、そうすればお前の病氣もきつと全快するだろう」とのお告げがありました。

悦浄は、その霊夢に感動し毎日

眺めている千石岳の気高い姿に心打たれ、四国八十八ヶ所霊場の勧請のことを思い巡らせながら、村人たちに相談したところ村人たちの強い信念と涙ぐましいまでの協力で、ついに文政二年(一八一九)から五年かけて大願が成就したのでした。



この霊場はお大師様の像だけでなく、四国のご本尊を勧請してあり、その番ごとに四国の寺の土を持ち帰りいちいちその台座の下に埋めて安置されています。

この順次は三汲寺を一番として始まり千石岳の山頂を一巡し西迫下の西光庵が八十八番の終わりとなっていました。後に巢山部落に勧請され昭和十二年十二月御本尊を再建し八十八番として安置されています。

郷土史家 原田義明

平成20年3月



和田の里探訪 22

今回から、古くから伝わる民話や伝説等を紹介しながら「地名の由来」について探ってみてみたいと思います。

ふるさとの歴史をたどり、もう一度ふるさとを再発見してみましよう。

馬神地名発祥の地

馬神の矢地峠に「榎田」という所があつて、その田の中に馬の頭に似た石があります。むかし、むかしある夜のこと



す。

変な鳴声をするので不思議に思つて、一晚中気をつけていたところ、どうも馬の鳴声に違いないといふことになり、そこらじゅうを調べたら馬の頭に似た石が出てきた。

たしかにこの石の馬の鳴声であることがわかつて、村人たちが相談して、神職に頼んで神に祭ること、に決め、「馬神森」としてお祭りすることとなった。

その後馬の鳴声はしなくなつたといふ。

それからのち、この地方を馬神と呼ぶようになったと言ひ伝えられていふ。

「現在この田の持ち主である藤井貞夫さんが、この由緒ある馬神の地名発祥の石の保存のためこの場所に「馬頭観音」を勧請されています。

郷土史家 原田義明

平成 20 年 8 月



馬神の由来

馬神の矢地峠に「榎田」という所があつて、ある夜変な鳴き声をするので、村人は不思議に思つて一晚中気をつけていたところ、どうも馬の鳴き声に違いないと、そこら中を調べてみた処、田の中から馬の頭に似た石を発見した。

そこで村人は相談して神職に頼んでその石を神に祀ることに決めて、「馬神社」といふことになつた。

その後、馬の鳴き声は止んだのでこの地方を「馬神」と呼ぶようになったと言ひ伝えられている。

馬頭観音

この観音に祈ると様々に無病息災を叶えてくれ、夫婦愛・長寿・持病もろもろの災難から逃れ自然災害を防止国内が平和になつても説かれています。



和田の里探訪 23

私達は生まれた所つまり故郷というものを大切なものとして、美しいものにしておきたいと願うものです。

故郷を遠く離れて出ているとこの気持はさらに強く感じます。私たちはもう一度地名の由来について考えてみる事にしましょう。

高瀬の「小津（こつ）は

木津（きづ）と言う

大原に「小津」と言う集落があります。この小津は「木津」が訛ったものだと言われています。

木津とは「川出した木材の集積場」のことです。

文治2年（一一八五）「今から凡そ八二〇年前のことです」奈良東大寺の再建にあたり俊乗房重源上人ら一行が徳地の柚に入り（當事材木を伐採する山を柚と呼んでいました）道もない深山に分け入って、口径五尺二寸（一・六m）長さ十三丈（三九・四m）にも及巨材を探し求め伐採して佐波川まで運び川岸にある木津（用材集積所）で、山行事職橋奈良定が用材

を検査し合格した材木に「東大寺」の極印を打ちつけた上、川を流して瀬戸内海まで運び出されたのです。

このような用材の川出しは佐波川本流だけでなく、この島地川流域からおこなわれたのです。

高瀬の小津は木津であり、島地川流域でも関水の施設があったとの伝承もあり島地川流域の川出しを重視したことをしめすものでありましょう。



木津跡地
（小津橋より100m位上流辺）

郷土史家 原田 義明
平成20年11月

和田の里探訪 24

和田の地名について

高瀬(たかせ)

高い山で谷が深く川の瀬音が高いので、高瀬という。

夏切(なつぎり)

古い書き物には、ミツクリ村とある。夏切は川から向うの村であるが、庄屋がここにいたので村名を夏切と変えたのである。

ナツギリとは「夏に木を伐り、秋にこれを焼いて作物をつくら」とつまり「焼畑」のことである。なお、三作は御作(ミツクリ)で、中世に貴族や豪族が自家用に作った田のことではないか。

埵(たお)

谷深く坂が多いので四方から登りつめたところであるから埵畑村と名付けたという。

畑の字を除いて埵のみにしたのはその後という。

米光(よねみつ)

この村の百姓はいずれも裕福で有徳の者が多く、米も多くとれたので、米光というと古老は申し伝えている。

× × ×

後記

れい明第279号と第282号と今回で三回和田の地名について考えてみました。

やはり伝説や語り継がれてきたものが多いようです。

地名は毎日その土地に住んで黙々と汗を流して働いた人たちの暮らしの中から生まれたものです。

だから土地に刻まれた歴史として大切にしたいものです。

郷土史家 原田義明

平成21年1月

和田の里探訪 25

米光の「殿様墓」

(井原元良の墓)

米光下の丘の上に中世の古い墓地があります。

この古い墓地を米光の地下の人たちは「殿様墓」と呼んでいます。

寛永年間(一六二四)市川就永が時の藩主毛利秀就に仕え、米光村馬神村を領していたころ、父親の筑前守元栄が幼少の頃母方の祖父井原彦右衛門元良に養育を受けたので、元良の菩提を弔うために、元良の「月溪傾西居



士」から寺号を得て「傾西寺」を建立し、市川、井原両家の菩提寺としておりました。

そのご米光馬神村の知行をつづけていた市川就永が配置換えとなり米光村を出て行ったので、無住となった傾西寺は、享保七年(一七二二)法隆山伝福寺に合併し廃寺となりました。

伝福寺には市川井原両家の位牌二十三霊位が今も安置されています。

今、墓地には八基並んでいますが文字が読めるのは三基です。左側が元良のお墓です。

千時造立石塔 一宇之奉意趣者

月溪傾西居士

千時慶長七季壬寅霜月廿九日

施主敬白

燈籠と花立に

市川伊豆守藤原經好十三世孫經寛、文政十三庚寅三月建立

傾西寺はこの墓地の下の段にあったのですが今は畑地になっています。

この傍らに民家がありますが、その家の門名(屋号)を傾西寺と今に伝えられております。

さてみなさん

ほうきよういんとう

このお墓は「宝篋印塔」(宝篋印塔とは立派な武士のお墓のことです。)と言います。「五倫塔」

ではありませんよ!。歴史ある貴重なお墓です。

大切に見守ってゆきたいものです!

郷土史家 原田義明

平成21年2月

和田の里探訪 26

廃絶となった和田村 三十三所観音霊場

三十三所観音霊場など、観音さまには、三十三の数字がよく使われています。これは観音さまの名をお唱えすることによって、観音さまが三十三身に変化されて現れ、あらゆる者の苦難をお救いになる慈悲のほとけさまだからです。まさに現生利益の仏さまとして、諸仏のなかでも特に広く信仰されています。

さてみなさん、この和田村に三十三所観音霊場が、あったことをご存じでしたか？

原赤の曹洞宗寿高寺に、この三十三所観音霊場の記録が保存されています。この貴重な資料を私が、地区別に分類してみました。



各辻堂にあった石仏

| | | | | |
|------|-----|-----|------|-----|
| 高瀬地区 | 21番 | 庵 | ○22番 | × 庵 |
| | 23番 | 庵 | ○24番 | ○辻堂 |
| 夏切地区 | 12番 | ○辻堂 | 25番 | ○ 庵 |
| | 26番 | × 庵 | 27番 | 庵 |
| | 28番 | × 庵 | 29番 | × 庵 |
| | 30番 | ○辻堂 | 32番 | ○ 庵 |
| | 33番 | ○ 庵 | | |
| 埜地区 | 4番 | ○ 庵 | 5番 | ○ 庵 |
| | 6番 | ○辻堂 | 7番 | ○辻堂 |

| | | | | |
|------|-----|-----|------|-----|
| 埜地区 | 8番 | ○辻堂 | 9番 | ○辻堂 |
| | 13番 | ○辻堂 | 14番 | ○社内 |
| | 15番 | ○ 庵 | 16番 | × 庵 |
| | 17番 | ×辻堂 | 18番 | ○辻堂 |
| | 19番 | ○ 庵 | 20番 | ○ 庵 |
| | 31番 | × 庵 | | |
| 米光地区 | 3番 | 辻堂 | ○10番 | ○ 庵 |
| 村外 | 1番 | 庵 | ○2番 | ×辻堂 |
| | 11番 | 庵 | | |

【備考】

1. 庵(あん)とは、寺院、観音堂など建物があるもの。
2. 辻堂とは、建物もなく路地のこと。
3. 和田村観音霊場なら当然馬神地区を入れるべきなのに入っていない。また村外である八剋、

上村を入れているなど不審である。
○は現存する物、×は現存しない物

この霊場を開創(巡拝コースとして開くこと)の際庵では、

和田村 第〇〇番 観音霊場 という



標札を建物の入り口に打ち付けておりました。辻堂では観音菩薩の尊像を丸彫した石仏を安置したものです。

その石仏の右肩に明治卅一年七月十日の文字が刻み込まれています。

然し今この和田村三十三所観音霊場は、廃絶しています。いつ、なんのために、廃絶したかは定かではありません。

然し、辻堂に置かれていた石仏は今僅かしか残っておりません、公会堂、お大師堂、または個人の家で残っているだけです、この石仏には開創年月日が刻みこまれています。和田の歴史を知る上に貴重な資料です。大切にしたいものです。

郷土史家 原田義明
平成21年8月

和田の里探訪 27

ひとくちに石仏といっても時代によつて性格が異なります。

古代においては、中国や朝鮮の文化の影響があり、中世におきましては、地域の有力者や武士などのものが多く、また近世では、農民や庶民の民間信仰に結びついたものがふえております。

そこで今回は、和田の里の道祖神「猿田彦大神」についてお話をしましょう。

さて、猿田彦大神とは、皆さんもよくご存知のとおり、天孫降臨の際これを待ちうけて道案内をしたという国津神であります。これがのちに道祖神と混同し、また猿田の猿を、曆のなかの干支の申と混同して庚申の神として盛んに祭るようになりまして、この和田の里の猿田彦大神も道祖神や、庚申の神とし

て祭られたものであります。

(和田の里にある猿田彦大神の石碑と石塔はつぎのとおりです)

(高瀬方面)

巢山の賀茂社 天保12年1841石碑

西迫から熊坂 安政6年1859石碑

に越す三叉路

長瀬から登尾 天保12年1841石碑

先山の河内社 明治24年1891石碑

の奥の院

秋字明の河内社 無記名

(米光方面)

赤羽根から仕出 嘉永6年1853石碑
木に越す三叉路

米光の河内社 天保4年1833石碑

埴の畑の三叉路 天保6年1835石碑

大谷の神明社 無記名 石塔

(馬神方面)

十郎の三叉路 天保5年1834石碑

東広沢から車木 明治13年1880石碑
に越す三叉路

西広沢万福山 無記名 祠堂

洞心寺境内

矢地峠の河内社 天保6年1835石碑
現在矢地峠の三叉路

湯野峠から矢地峠

に越す三叉路 無識名三叉路
現在湯野峠の地藏堂

久かたのあめのやへ雲

ふりわけて

上村橋の三叉路 ぐたりしきみをわれそ

むかへし

さて、道祖神とはどんな神かと申しますと、部落の境などの道路に立つて、外から侵入する悪霊や邪悪をふせいでくれる**塞の神**や、また中国から渡来してきた、**行路安全守護の神**などいろいろあります。

また、庚申信仰とは、人の体内にいる三戸の虫が六十日目ごとに廻ってくる庚申の夜その人の寝ているすきに体内を抜け出して天にのぼり、天帝にその人の犯した罪過をちくいち報

告する。天帝はこれを聞いてその人の死期を早めるという。そのためには一夜を眠らず身を慎み、しあわせを願うという説であります。

この民間信仰から庚申講が組織され、順番に当屋をきめ、酒食を共にし、語り明かしたといわれています。 **庚申塔はその供養のために造立されたものであります。**

しかし、現在においては生活環境は変化し、その講そのものがすたれて、今や忘れ去られています。

みなさん・・・この**猿田彦大神**のその石碑は、民衆の間に広く深く普及していた**庚申信仰の、民俗的記念碑**というべきでしょう。私達の貴重な文化財です、大切にいたわりましょう。

郷土史家 原田 義明
平成21年10月

和田の里探訪 28

古寺を訪ねて

高瀬殿明に古刹三汲禅寺がある、参道の案内板を通りすぎ望岳門と扁額のかかった山門ぐるど、玉垣の左右の碑面に「溪聲廣長舌」「山色清淨身」と漢詩が美しい字体で刻み込まれている。石だんを通り本堂に山号を高瀬山と号し、曹洞宗三汲寺と金文字の額がかかっている。本尊は、釈迦如来坐像・脇侍文珠菩薩騎獅子像・同普賢菩薩騎象像の三尊を安置しています。

寺伝によれば元和八年(一六二二)竜文寺十七世連叟昌亮が、勧請開山となり、一寺を建立して三汲寺と稱し竜文寺の末寺となった。それまでは、地汲庵と稱し小さな庵であった。

「寺社由来」によれば、宝永二年(一七〇五)に堂宇を再建したことが記載されている。現在の本堂と庫裏はその時の建物である。すでに三百年以上経っています。

昭和五九年(一九八四)は弘法大師一一五〇年忌にあたり、当寺では盛大な大師会がおこなわれたので、種々整備事業もあり五八年頃茅葺屋根はそのまま残し

上からトタンで包み茅葺屋根をトタン葺に改めた。

住職は、一代東和豊春からはじまり十六世恵海正之と続いていたが、現住恵海正之師(本名林正之)は平成七年(一九九五)七月に遷化されその後跡継ぎがなく、坊守の迪子氏も次女の許に身を寄せられたので完全に無住となった。

現在の役職は月輪寺住職中村棟俊師に委託兼務されています。

鐘楼門の建立時期は明らかでないが、明治二十二年(一八九九)に修理しその時茅葺を瓦葺に改めた。梵鐘は戦時中供出し現在は明和八年(二七七二)三田尻の鋳物師郡司信規が鋳造した半鐘を懸け吊るしている。

また本堂の軒下に吊るされている梵鐘は、檀家の佐藤友雄氏が昭和五十年(一九七五)八月に寄進したものである。(この梵鐘の銘の中に、妙音五郷に響く、とあるこの五郷とは) 巢山・西迫・秋字明・殿明・大原の五集落のことであろうか。

境内の観音堂は、当寺前住職寿山義康延宝元年(一六七三)に徳地三十三観音霊場を始めたときに創建された。その後八十年の星霜を至て、宝暦十年(二七六〇)に再建された。

本尊は、聖観世音菩薩座像で像高(3.6cm) 鉢内に銅造阿弥陀如来像を安置している。またそのほかに地藏菩薩座像、弁



山門

財天座像、聖観世音菩薩坐像を安置しています。

時代はすべて江戸時代のものです。

境内は、玉垣で巡らされている、そのなかに地藏菩薩立像や、経納塔、六地藏、高瀬八十八ヶ所札所一番、孝子貞弘永次郎夫婦碑などが建っています。当事の寺宝として伝存している貴重な資料は、

- ・ 紺紙金泥後奈良天皇宸筆 妙法蓮華経普門品 一卷
- ・ 天正二年の古写経 一綴 (前身地久庵奥書)
- ・ 聖観世音菩薩坐像鉢内仏阿弥陀如来坐像 一軀
- ・ 金銅経筒 二口

この金銅経筒二口は中世寺院の研究史料として重要であり貴重なものとして市の文化財に指定されている。

郷土史家 原田義明
平成22年2月



和田の里探訪 29

古寺をたずねて

大字夏切の原赤に古刹寿高禪寺がある。石だんの脇にはほゞえましく、お地藏さんが座して両手掌を重ね宝珠をいただいておられる。その台座には「萬霊等・寛政二年辛亥三月吉祥日」と彫りこんである。

白く輝く山門を見上げながら石段をのぼる。左右に門柱がそびえている。右の門柱に「昭和八年三月彼岸、鉄舟代」と、左の門柱には、「寄附主家永又一」と彫りこんである。そのまゝ本堂に向かう山号を「保養山」と号し、「禅曹洞宗寿高寺」と額がかかっている。本尊は「聖観世音菩薩坐像」脇侍「普賢菩薩騎象像」同一文珠菩薩騎獅子像の三尊を安置している。

曹洞宗保養山福寿院の寺伝によれば、万治元年(1658年)月輪寺三世外叟永雲大和尚の創建と伝えられ、四世白峰元龍を中興とし、月輪寺の末寺となった。以後三世から十四世眼山真龍へと嗣いだ。

さて、時代は明治維新に移る。明治元年(一八六八年)この頃すでに、仏教界では「廃仏毀釈」の嵐が全国に吹きすさび仏教界は、はげしい弾圧にさらされ大きな打

撃をうけ未曾有の危機にさらされていたのです。明治四年(一八七一年)福寿院の十四世眼山真龍和尚と、高德庵十七世実応黙悟和尚とが相談し「廃仏毀釈」の際両寺が合併することを決議したといわれています。

当時は、茅葺屋根でしたが、昭和十二年(一九三七年)三月に瓦葺に改めました。本堂の軒下に吊されている半鐘は、大正五年(一九一六年)都濃郡湯野村の鋳物師楡音熊、柏原熊治が鋳造した半鐘を懸け吊しています。

●福寿院第十四世福原眠山和尚は、嘉永六年(一八五三年)から明治六年(一八七三年)までの二十年間寺子屋の師匠として寺院教育に尽力された。(当時の子弟、男四〇女一六名本堂の間取りが小さく区切つてあるのが今に残っています。

●明治五年(一八七二年)学制発布が発令され、この和田村では、明治七年(一八七四年)になって、高瀬小学が殿明に、林小学が寿高寺(寺院借用)に、馬神小学が十郎にそれぞれ学校が新築されました。林小学は寿高寺で開校されたが明治十二年(一八七九年)に梶尾小学が新築されたのでそれから梶尾小学に引継がれた。この寿高寺の林小学がのちの和田小学校の前身として発展していったのである。

●本堂の片隅に「和田村三十三所

撃をうけ未曾有の危機にさらされていたのです。

明治四年(一八七一年)福寿院の十四世眼山真龍和尚と、高德庵十七世実応黙悟和尚とが相談し「廃仏毀釈」の際両寺が合併することを決議したといわれています。

明治四年(一八七一年)それまで神頭谷にあつた曹洞宗医王山高徳庵の寺伝によれば竜豊寺(大道理)九世実参円瑞大和尚が宝永四年(一七〇七年)勸請開山となり、二世大器徳韶を中興とし、竜豊寺を小本山、竜文寺を本山として、以後三世から十七世実応黙悟と嗣いだ。

明治四年高德庵は福寿院の寺地に合併し統合された。

そして両寺の縁字をとつて寺号を「寿高寺」と命名し、改稱しました。合併後寿高寺は、福寿院の世代をうけて、十四世眼山真龍・十五世実応黙悟(高德庵十七世)と始まり、二〇世山本見龍と嗣いだ。山本見龍師は、平成十一年(一九九九年)遷化された。その後跡継ぎがなく、四月に坊守の輝子夫人も長女の許に身を寄せられたので、今完全に無住となりました。

現在の役職は、月輪寺住職中村棟俊師に委託兼務されています。

「寺社由来」によれば堂宇は、延享二年(一七四五年)六月二十五日大洪水の際崩壊し、もとの堂

観音霊場」の貴重な資料がある。

この三十三所の各札所の石仏(観音菩薩立像)に「明治三十一年七月十日」の文字が彫りこんであります。

この七月十日を霊場の開創日として当寺では打ち始め、うち終りには法要を厳修されていたものと思われませんが、現在この「和田村三十三所観音霊場」はすでに廃絶となっております。

郷土史家 原田義明

平成22年8月

終わりに

寿高寺総代の伊藤禎亮さんよりいろいろ御協力いただきました、ここに謹んで厚く御礼を申し上げます。



寿高寺



和田の里探訪 30

賀茂神社と

巢山孫左衛門重高の墓

●賀茂神社、大字高瀬巢山にあり、祭神は句々くぐぬち迺知命、菅野姫命を祀る、むかしは加茂大明神と称し、また天降の鎌をもつてご神体としていたので鎌大明神とも言っていた。

むかしこの地に住みついた巢山孫左衛門重高という者がこの地を開拓した際、この土地の守護神として、京都の賀茂神社を勧請したのではなからうかと伝えられているが確かな記録はない。

この神社には伝説がある。

「往古から旧暦の閏九月の年毎に十四日の夜境内の神木に鎌が天下るといふ、この鎌は藤の実の形をして長さは5・6寸という。今9枚が神前に納められ、慶長・享保・元禄・寛政・天保のものは社殿に記されているという」

「また享保の頃ある旅人が社の山に立派な鎌が落ちていたので、そ

れを拾って持ち帰り宮市(防府)の町人磯部庄右衛門の鍛冶屋に売り払った。

鍛冶屋はこの鎌をふいごにかけて、ふいたが一向に沸かない、こんな鎌を今迄扱ったこともないといふ気持ちが悪くなり、そのうち夜毎悪夢を見るのでこの鎌を賀茂神社に納め、石灯籠を建てたという。

いまにその石灯籠があり、享保十二年丁未正月吉祥日周防佐波宮市住人磯部庄右衛門奉祈心と深く彫りこんである。」



● 巢山孫左衛門重高の墓

巢山の新道の丘の上に共同墓地がある。高さ一・二五mで、五輪の石塔で上から三段目の部分に、奉訪道慶禅門吉応仁元丁亥曆、と彫つてある。

巢山の古老の話によると、「巢山

孫左衛門重高は平家の残党で、文治元年(1185)源平の壇の浦の戦いで平家は滅亡した。その平家の落人が本名を隠し、山田庄右衛門と変名してこの巢山に住みついた、その人の墓ではないかといふ伝えています。」

⑤・防長風土注進案、和田村誌にはこの墓を五輪塔と言っているがこれは誤りで、実は宝篋印塔の部分を重ねたものです。(宝篋印塔とは立派な武士の墓のことです。)

・応仁元年とは(1467)であり282年経過後身寄りの者が墓を建てたものでしょう。



郷土史家 原田義明

平成22年11月



天降り鎌の降った場所



賀茂神社

和田の里探訪 31

はまいば
羽舞場の
あだだし

粟大師を探ねて

今ここに、その存在すら気付かれぬままに、そして忘れられ、果ては埋もれてしまおうであろう貴重な石碑がある。

古屋敷の川沿いから1Kmあまり深い山奥を登りつめた「はまいば」の地、日差しすら入らない昼なを暗さを思わせる深い山林の中である。昔は広い畑地であったという。その一角に1m四方の石組の台座に高さ1.75m、前面0.75m、奥行き0.63mの花崗岩づくりの立派なお堂が建っている。

そのお堂の中には右手に五鈷を持ち、左手に数珠を胸前に持ち坐しておられる。下方には杓と水瓶が配しており弘法大師坐像を祀っています。そうですお大師さまです。

特に目をひいたのは、一房の粟の穂が肩の上に垂れているのです。豊



かに実った黄色くいろずいた粟の穂が本物のように見えるのです。

それから私は裏手に廻って見ると坐像の光背の部分に縦99cm、横46cmその全面に碑文が陰刻さ

れています。肉眼では判読できないので、拓本をとってみると、

「千百年の後霊験いやちこに遊ばさるは弘法大師なり此所に小田傳治郎の弟に小田品蔵なるものあり若

き頃より神仏を念ずること人に勝れて篤くわきて弘法大師を信ずること一層深かりき大正三年五月廿一日不思議にも傳治郎が耕作せる畑地に粟の苗の如きもの恰も人の

蒔きたるが如く生ひ出たるを傳治郎品蔵兄弟のもの見うけたり兄弟に近所の人も来り蒔かぬ種は生へぬと語り合へり品蔵曾てかかる霊験

あることを聞き信念あるよりこれを弘法大師にうかがひしに粟なりと定まれりさらばとて兄弟のものを耘り耕せしに果たして立派なる穂を結びそれより古屋敷のお大師さまとて人々云い伝へて方々より日々人の参詣するに至れり依つて其の畑地の主小田寅吉を始め古屋敷全部落のものどもこのありがたきお粟のことを後世に伝へんものとて碑を造りそのはまいばの地に建つ大正四年七月廿一日」

(高瀬三汲寺住職林機先撰)

以上碑文終わり、その後唯言ふことなく、このお大師さまを「粟大師」とよんでいます。

さて弘法大師にまつわる伝説は数多く残っておりませう。

特に水や穀物にかかわる伝説は有名ですが、この地にお大師さまが粟の種を、五穀の種を結ばせて下さったこの奇蹟、この事実を私は先人の深い信心と努力に感動しながら調査を終えて山を降りたが、もうこの人里はなれた山奥におそらく一人一人訪ふ者は居ないだろう。この深い森林の谷間の中に埋もれてゆくのであるうか……。

郷土史家 原田義明

平成22年12月



和田の里探訪 32

高瀬の金剛水

高瀬千石岳（標高630m）の東側中腹、熊坂峠の路傍に古くから滾滾と湧き出る不思議な水があります。いかなる旱天でも涸れることなく、大雨が連日降ろうとも、その水が増えることもなく、また濁ることもありません。

その水源が岩石の深い底から湧き出るので水質が特に清冷で、いつも通行人の渴きをいやし、流れは田畑もかんがいしています。

地下の人たちは「この水はお大師さまがお授け下さった有難いものだ」と霊験あらたかなものとして、霊泉と呼んでいます。そもそもこの千石岳は、文政年間（1819～1829）弘

法大師の四国八十八ヶ所の霊場が祭られており、八十八体の石仏が永い間風雪に耐えながら山頂へと続いております。

昭和二十五年「三波寺林機先、松田稔、佐藤宗十、藤田亀助、佐藤芳衛、神田仁山、佐藤民蔵等の発起によって、この霊泉のかたわらにある巨岩に石仏を安置し、機先師の筆で「霊源」及び

「金剛水」の題字を刻み、千石岳弘法大師八十八ヶ所奥一番の札所として世に紹介された。

供養塔に機先師の偈がある。

千石山頂瑞色明

霊泉千古萬世名

真如顯現金剛水

除患增益及群生

.....

.....

.....

なお、松田稔氏寄進の石仏（釈迦如来座像）はもと深川の大寧寺にあったものを請うてこの地に安置されたものです。

××××××××××××××××

以上が金剛水の発祥の由来です。

この金剛水は、今もつて防府、新南陽、徳山方面から利用者が絶えません。（この水はおいし何か身体の調子が良い）と言われています。

××××××××××××××××

大気澄み、水清き処、金剛

水は滾々として尽きることなく、高瀬の里人の心にいつまでも清らかに流れ続けることだろう。

郷土史家 原田義明

平成23年2月



夏切の鐘



図柄は蓮を表しています

この鐘は、総高59cm、口径33cmの半鐘で、蓮を表す図柄で鐘全体をまとめた、他に類例のない斬新な発想から生まれたものであります。

時代は、寛政四年（一七九二年）で、当時の防府の鋳物師、藤原信規の作品で、製作依頼主は西圓寺の僧、恵晃であることが鐘に記されています。

半鐘は、全体が上中下に分かれており、上の部分が「乳の間」、中の部分が「池の間」、下の部分が「草の間」と区別されています。この「乳の間」と呼ばれる上

の突起は、ひとつひとつ蓮の花を形作っており、しかもすべての突起に変化を与え、蕾から開花の状態を表しています。また、下部の部分の「草の間」に広がっているスカートのような模様は蓮の花弁で、波形になっている底の部分は、葉を表しております。

このような図柄は、日本の鐘の中では非常に珍しいものです。さらに中央の「池の間」には、天女の舞い姿が絵画的に彫り出され優雅な感じを与えています。天蓋も模様化されて配されています。たとえ専門家でも、この鐘の図柄としては他に類の少ないものと驚く程でしょう……。

(銘)

防府佐波郡上徳地村

西圓寺 恵晃

寛政四年壬子 七月吉日

防府住治工郡司木工丞

藤原信規

(「西圓寺」、今ではその寺の所在は明らかではありません。)

× × × × × × × × × ×

今、夏切地区の火見櫓に吊り上げられて火事報知の役を終え、現在自治会長宅に保存されています。

この夏切の鐘は貴重な文化財です。大切に見守りましょう。

郷土史家

原田義明

和田の里探訪 34

田戸石風呂

いまつゝむ話

故（渡辺幸一氏）から由来話を聴いていたことを、記憶の中から記してみました。

◎ 田戸の石風呂が作られた話が、奈良東大寺の再建に際して、滑の官林（現Ⅱ徳地八坂と柚野の国有林）から、桧や松の用材を切つて佐波川（八坂〜三田尻港）を筏を組み、関を作り流して運んだことは、今も語り継がれている有名な話である。（この時代Ⅱ建久元年〜六年Ⅱ一一九〇〜一一九五）今から八九〇年前の事。その人夫達の疲れを癒し、療治の場として「岸見の石風呂」など各所に石風呂を造った。その時代に、ここ田戸は、「日の森」といわれ、今の石風呂あたりは大木が繁った森林であった。重源上人は、その大木を切つて運び出すために、三十人ぐらい連れて来たそうである。その木切人達の身体を疲れを取るために、ここに石風呂（岸見の小

型）を造ったとの話である。（この時代八九〇年前のことになる。）その時の人夫の見張り役に、田嶋家の先祖である湯野の「二本差し武人」が来ておられた。《重源上人は、建永元年（一二〇六）六月四日享年八六歳で死没》このことから「田戸の石風呂を重源上人が造った。」話は、おかしい。（田戸石風呂保存会）

平成20年4月

今、この石風呂は、田戸石風呂保存会の皆様が修復され地区の憩いの場となっています。



和田の里探訪 35

升谷杵崎社の八朔祭りとは

升谷サミット

升谷の杵崎社（標高 四三四メートル）のお祭りは、戦前は毎年八朔（旧暦八月一日）に行われ、子供達にとっても楽しい行事でありました。

戦争が激しくなり中止されたまま、戦後も復活されないでいましたが、今年九月四日の八朔に六十年ぶりに開催されました。

今年春頃から登山道の藪を伐り開き、道並びに山頂の広場を整備して、国旗を掲揚し、麓からも見える様にした所、杵崎様への関心が高まってきました。

そこで、自治会有志で話し合い、升谷出身の方へも呼びかけたところ、沢山の賛同を得て、当日は四歳から八十三歳まで五十人の参加がありました。

山頂では国旗掲揚と国歌斉唱を

し、五幣、杵崎社祭銘板をほころに収め、参拝、全員の記念写真、唱歌「ふるさと」を合唱し、高瀬湖や周辺の山並みを眺めながら昔を懐かしみました。

下山後は何十年ぶりの再会を喜び、升谷の歴史を語り、時間のたつのも忘れて昔話に花を咲かせました。

寄稿 貞弘徳之

平成 17 年 10 月



100年祭記念碑



和田の里探訪36

由緒ある

殿明の三の宮

郷土の伝説

●大宇高瀬殿明に『三の宮』というお宮があります。

このお宮の創建については定かでないが、松田家の家伝によれば、室町時代(一三三八)守護大名大内氏の家臣で「平野某」なる人物がこの地にはいり、ここ殿明に住居を構えて住みつき、山口市宮野にある「仁壁神社・三の宮」の御神霊を勧請して、自分の屋敷内に「屋敷神」として奉祀し祭礼も行っていた。その後この「平野・某」なる者には後継者がおらず家督を継ぐ者がおらないのでそのまま家は断絶し、屋敷神の三の宮も荒れ放題に廃たれていった。と記録されています。

その後この屋敷の跡地に松田家に移りこられて、ここに居を構えて住みつかれる。

この松田家は代々士族の家柄で毛利藩の主要な地位の名家である。

安永九年(一七八〇)当主松田源左衛門幸邑氏が、長いあいだ荒地になり荒れ放題に廃たれていたこの三の宮を修復され再建して松田家の屋敷神として奉祀された。その後明治九年(一八七

六)に社殿を修復し造管されている。天明元年(一七八二)五月に祠前に建立した石燈籠一対が現存している。

現在の社殿は平成八年(一九九六)に再建したものである。祭礼は一月一日で今では殿明部落で祭りを行っている。

× × × × ×

我が国では、十世紀前半頃から国内の主要な神社に、一の宮・二の宮・三の宮などの順位をつけて、これを重んずるしきたりがありました。私たちのこの周防の国の、一の宮は、防府市佐野にある玉祖神社、二の宮は、山口市徳地の堀にある出雲神社、三の宮は、山口市宮野にある仁壁神社となつています。これらの神社には、守護大名大内氏の厚い崇敬と庇護によって繁栄したといわれています。

× × × × ×

終りに

(この和田の里において、屋敷神のある家は三ヶ所ありますがみんな小さな祠です。この松田家の三の宮は、石燈籠に囲まれた木造瓦葺社殿造りの立派なお宮です。)

平成23年11月

郷土史家 原田義明



和田の里探訪 37

「紙すき窓」

のある農家

農家での一番の特徴は「かど」と「にわ」である。

農家に必要な「かど」（前庭）はほんや本家の前に広くとられ作物の干場と、また混納作業に役立て、納屋と本家との間を利用出来るよう、ふた屋を作っている。

屋根は殆ど、カヤ、ワラ葺である。ワラと言っても稲藁ではなく小麦藁を使っている。屋根は葺草によって耐久力が違う、小麦藁で十七、八年、萱葺きで二十五年が普通とされ、厚く葺けば五十年といわれている。

本家の「にわ」（土間）は、広くとり夜なべ仕事もさわりなく、出入り口のすぐ横に紙すき窓がある。この窓の「にわ」の隅には必ず「紙すき舟」を据えていた。紙すき場の明かりとりである。この窓を「明り窓」といい、また「連子窓」とも言った。

今はもう、この窓のある家を見ることは出来ない。紙を漉いていた名残りも、今完全に消え失せようとしている。

昔、農家の殆どが副業に紙を漉いていた。然も百姓たちの生計はなんじゅう難 渋をきわめていた。

寛文六年（一六六八）徳地和紙請紙制度がおかれた。

この制度は、実際に紙を漉かなくても、これに対する紙を買ってでも上納しなければならなかったのだ。紙を漉いても自由に売ることはできない、こっそり売って、これが見つかったら本人のみならず、庄屋、畔頭まで重い科を受けた。そのため百姓のくらしは悲惨な貧窮のどん底に落とされていったのである。

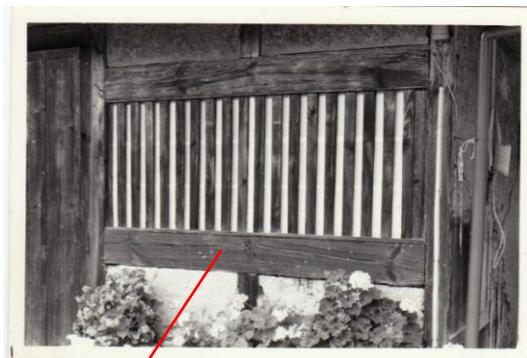
この毛利藩の請紙制度は、藩主を益し、百姓を貧窮のどん底に落とすもので、紙漉きの盛んな地方ほど貧乏したと、言われている。

明治になってからこの請紙制度は廃止され、一般の民間企業となつて、紙商人によって売買がされるようになった。

和田地区に、今でも残っている「紙すきの義民大江源八」の伝説なども、紙すきの重い意味を持つ仕事であつた事情をとくと考えさせられるものである。

徳地和紙が名声を博したのも、品質の良い高瀬の横大津楮よしおおつこうぞがあつたからと言われている。藩政時代から農家の副業として盛んであつたこの紙すき業も昭和四十四

年完全に消滅した。：：然し、「紙すきの義民大江源八」の伝説は、いつまでも語り継がれてゆくであろう。



紙すき窓

（郷土史家 原田義明）



高瀬地区

30

30 巢山孫左衛門の墓

32

3 14

21

15

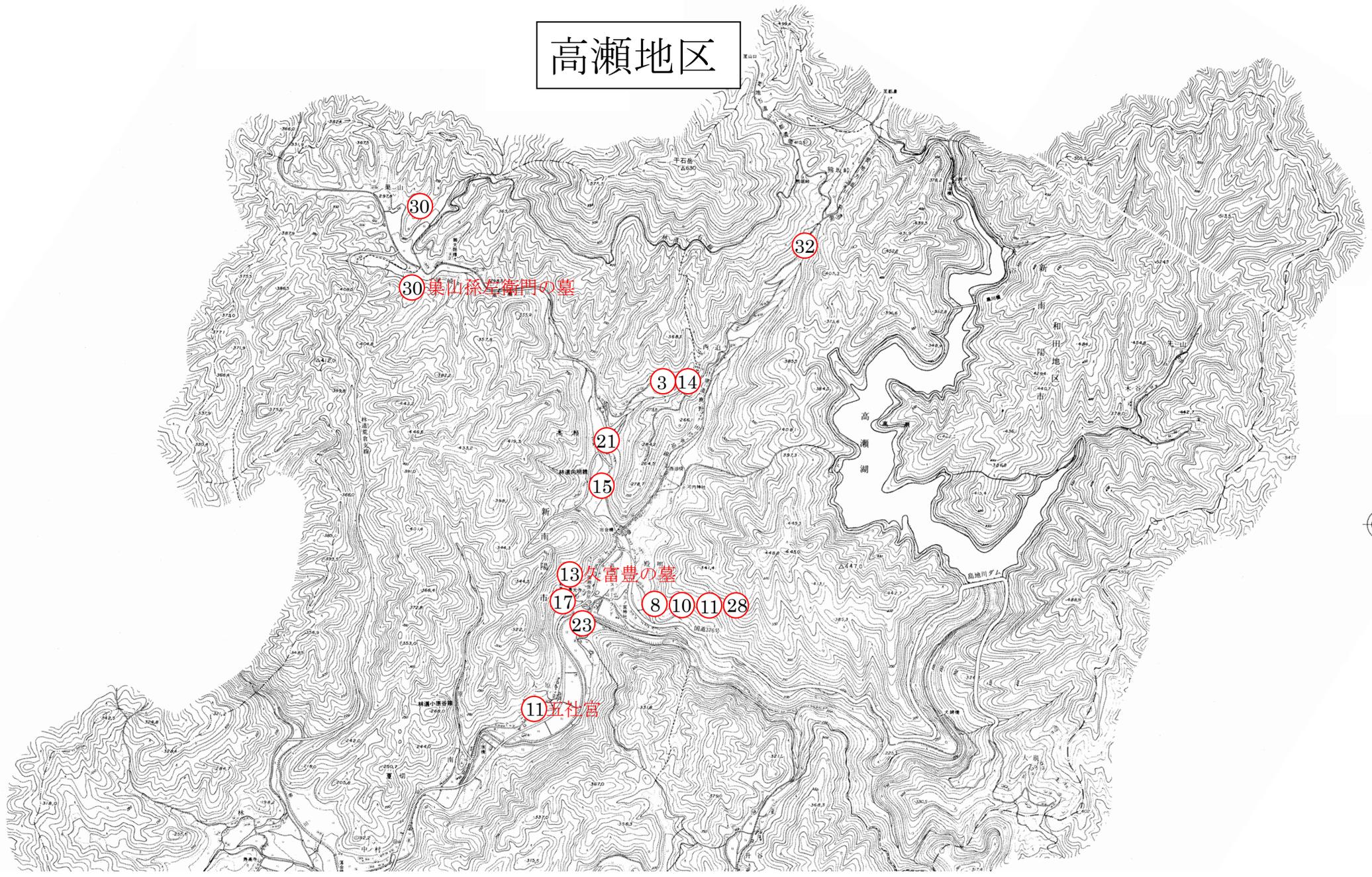
13 久富豊の墓

17

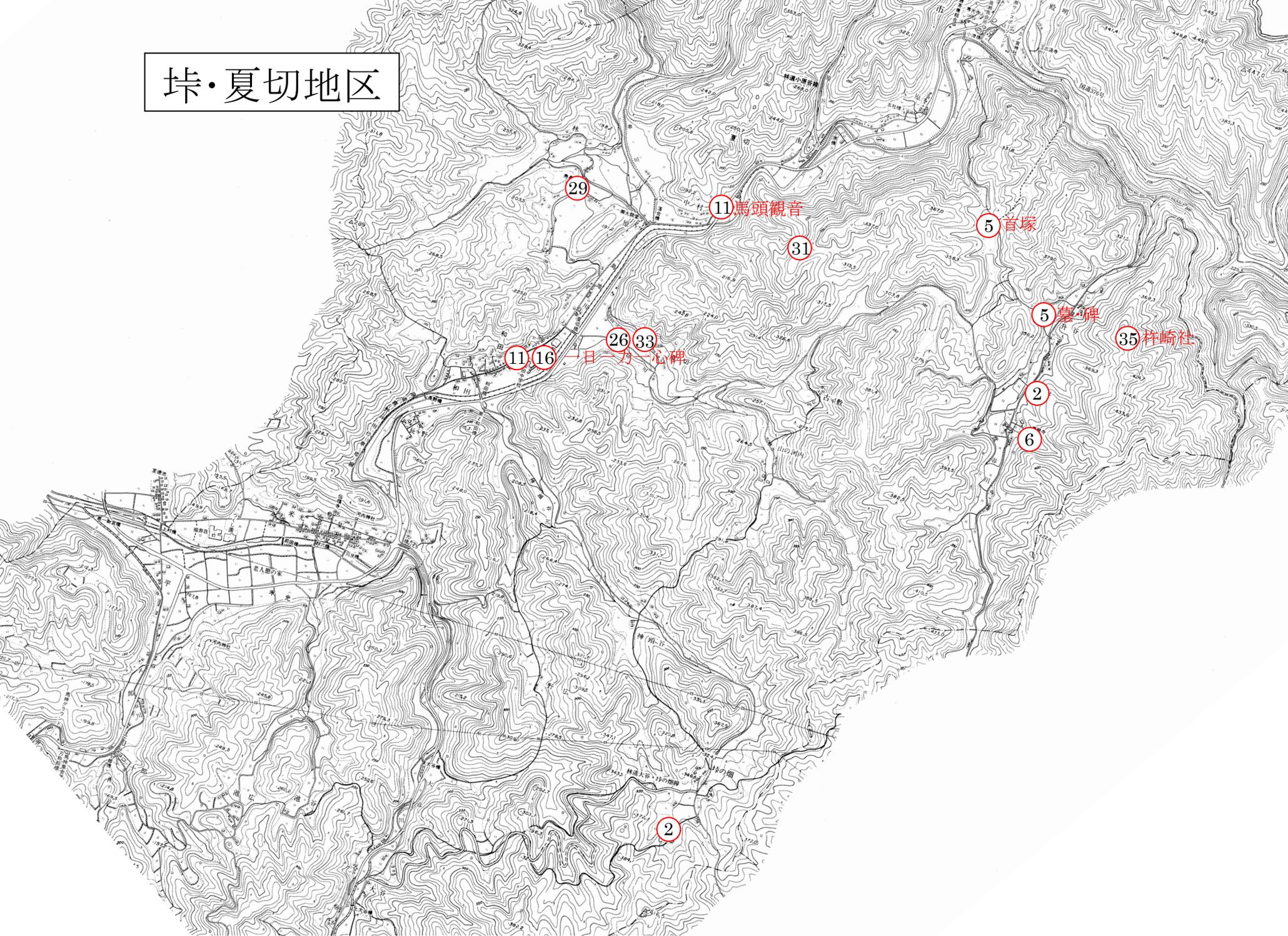
8 10 11 28

23

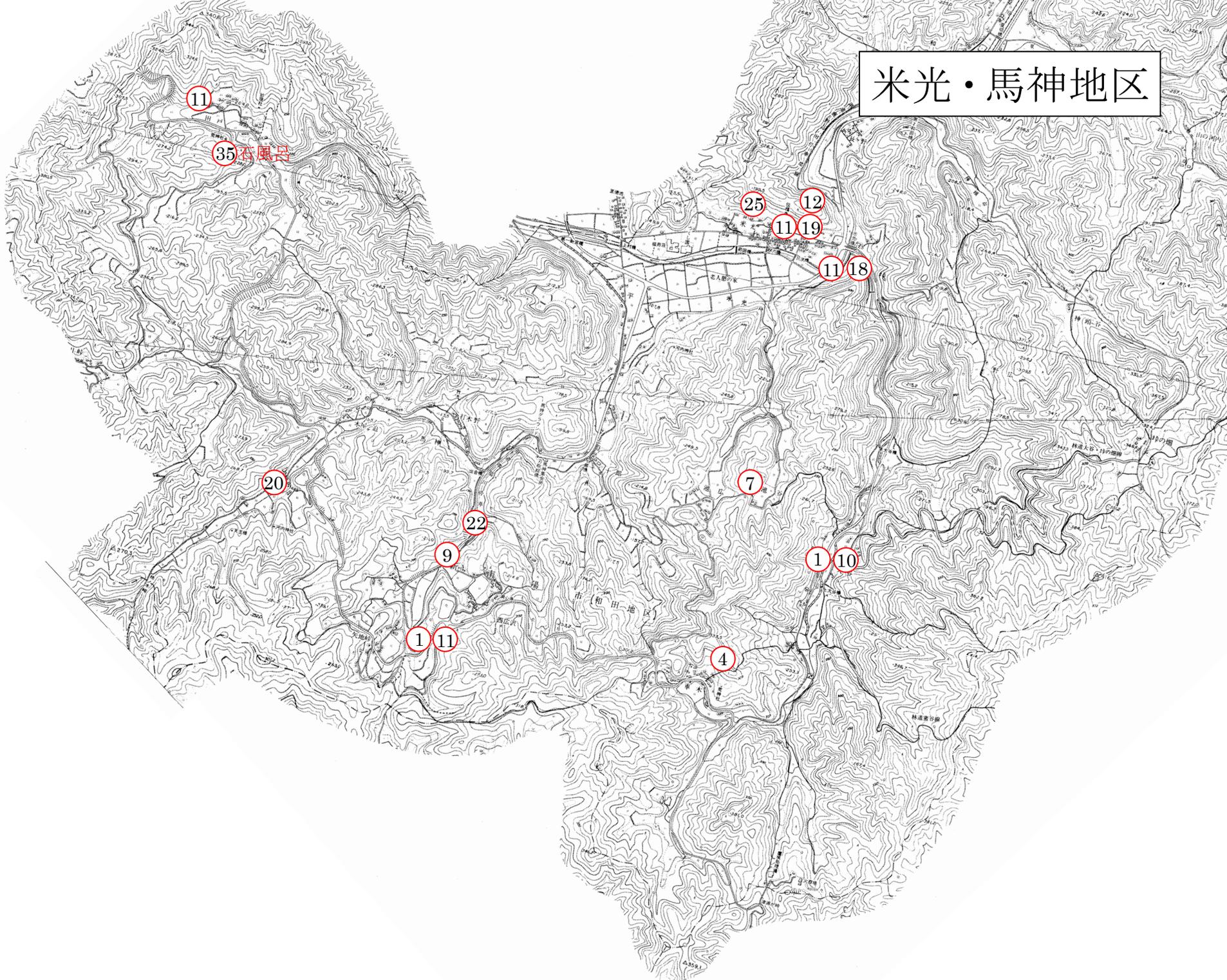
11 五社宮



埜・夏切地区



米光・馬神地区



11

35 石風呂

25

12

11

19

11

18

20

22

9

7

1

10

1

11

4

協力者

高瀬大原
新田一丁目
川崎一丁目
和田地区社会福祉協議会会長
和田地区民生児童委員協議会会長
和田の里づくり推進協議会
和田支所長
和田公民館
和田公民館
和田公民館

原 渡 貞 財 財 池 大 藤 津 松
田 辺 健 徳 弘 間 間 田 野 岡 本 本
義 二 之 宏 宏 和 正 登 和 浩 紀
明 二 之 宏 宏 和 志 枝 夫 子 子